

地域おこし協力隊通信

..... 第22回



リポーター…
森山健吾 隊員



皆さんこんにちは!!
22回目の協力隊通信です。今回は、現在市内の小中学校を対象に実施している講演「地域おこし協力隊が今、子どもたちに伝えたいこと」についての話題をお届けします。講演では、そもそも地域おこし協力隊とは何か、どんな活動をしているのかなどを紹介。その後、本題としてヨソモノ目線で見ると潮来の魅力、2年半の活動を経て、今、子どもたちに伝えたいことなどを話しています。また、一方的に話すだけではなく、O×の用紙を配り、子どもたちに問いかけ反応を確かめながら実施しています。授業後のアンケートでは、「潮来をより好きになれた!」、「生まれも育ちも潮来なので、潮来の魅力なんて考えたこともなかったけど、今日の講演で潮来の魅力を感じることができた!」などの感想がありました。子どもたちにとって、何かひとつでも気づき、学び、

発見があったら嬉しいですね。そして、潮来という故郷にいつまでも関心を寄せ続けてほしいと思います。そんな姿や行動がさらに次の世代へと受け継がれていくことを期待しています。さて、今回の講演を実施しようと思っただけがありません。残り半年に迫った協力隊の任期の中で、何か地域に恩返しができないかという考えがありました。その中で、「地域での学びを地域に還元する」。それが、ひとつの恩返しだと思い、これからの地域を担う子どもたちに少しでも自分の経験・考えを伝え残していければという思いからこの講演は実現しました。今回、講演実施を承諾・受け入れてくださった学校関係者の方々には本当に感謝しています。今後任期が終了するまでの間、実施の希望があった市内小中学校を対象に講演を行っていく予定です。

まちづくり・潮来の自然と歴史を知る

潮来市の誇れる自然

第61回

オンライン公開シンポジウム

「霞ヶ浦流域研究2021」

コロナ禍の一年間でしたが、そんな中でも霞ヶ浦や周辺水域のフィールドでは、学生たちが日々コツコツと卒論・修論研究に、そして、市民や研究者も環境や生きものなどの調査・研究に取り組んでいます。霞ヶ浦流域において調査・研究を行う学生・生徒、市民、研究者が一堂に会し、最新の成果を報告しあうシンポジウム「霞ヶ浦流域研究2021」が、潮来市にある水圏環境フィールドステーションの主催で、3月7日(日)にオンライン会議システムを使って開催されました。

口頭発表18件、ポスター発表12件が行われ、90人以上の方が参加してくださいました。もちろん、オンラインですからも、発表者も参加者も自宅や職場などのパソコンからの参加です(写真上)。これまで遠方で参加できなかった方々が、オンラインであれば参加できるかもしれないと感じていましたが、実際に、県外から多数の方々に参加してくださいました。



茨城大の研究室で大学生がオンライン発表中



北浦周辺で採集された絶滅危惧種ホトケドジョウ (撮影：木村 将士)

今回も発表の内容は多岐にわたりました。例えば、潮来市内の希少ゲンゴロウ類、北浦周辺の農業水路の魚類相、絶滅危惧種ホトケドジョウ(写真下)の生息状況、外来種アメリカナマズが漁師さんの張網内で漁獲物を食い荒らしてしまう事例、地域での魚の呼び方や食文化、霞ヶ浦の水質や底層に形成される貧酸素水塊の挙動、周辺地域でのユスリカ成虫の発生量の実態など。さらには、霞ヶ浦流域ではないのですが、福島県の帰還困難区域での放射線物質の挙動やその対策、海外をフィールドにした地球温暖化に関わる話題まで。学生たちの新たな成果に、プロの研究者が鋭い質問をして、白熱する場面もありました。今後も地域の教育・研究機関と連携しながら、このシンポジウムを年1回行つて、地域の環境問題のいまとこれからについて考えていきます。

茨城大学地球・地域環境共創機構水圏環境フィールドステーション
樽井美香・碓井星二・加納光樹